タイトル：支え合う社会へ
学校名・学年：関西創価高等学校３年
名前：穂苅　奈保子

（本文）
　私は、障がいのある人もない人も、お互いを理解し、支え合いながら暮らせる社会が、本当の意味での共生社会だと思います。この考えを持つようになったのは、私の父が大脳皮質基底核変性症という病気になったことがきっかけです。父の病気は難病に指定されていて、今現在も治療法が見つかっていません。父が病気を患ったのは私が小学５年生の時でした。父の病気はだんだん進行していく病気で、今まで普通に話すことも食べることも歩くこともできていた父が、少しずつ体を思うように動かすことが難しくなり、日常生活でも家族の支えが必要になりました。幼かった私は病気について詳しく理解していたわけではありませんが、「お父さんはこれからどうなってしまうんだろう」と不安に思ったことを今でも覚えています。
　そんな父を一番近くで支えていたのは母でした。食事や着替え、移動の手伝いなど、毎日の介護を一人で続けていました。母は大変なはずなのに、父の前では必ず笑顔で接し、優しく声をかけ続けていました。私はその姿を間近で見てきて、誰かを支えることは決して簡単ではないけれど、相手を思いやる気持ちが支えになるのだと感じました。
また、家に介護従事者の方が訪問し、父の介護をして下さる姿を見て、人を支えることの素晴らしさを感じていました。
　現在、父は施設で生活しています。家で暮らしていた頃とは環境が変わりましたが、多くの介護士や看護師の方々が父を支えてくださっています。私は施設の方々を見て、障がいのある人が安心して生活するためには、家族だけではなく、地域や福祉の力も必要なのだと実感しました。一人の力だけでは難しいことも、多くの人が支え合えば安心して生活できる環境を作ることができます。
　父の病気を通して、私は障がいは決して特別なものではなく、誰にでも起こり得ることだと考えるようになりました。数年前までは元気だった父が、今こうやって食べることも喋ることも出来なくなってしまったと思うと、自分たちが思っているよりも障がいは身近なものです。父が病気と戦うことで、たくさんの人を励まし、力になっていると思うと、障がいの有無に関わらず、これこそが共に支え合う「共生社会」に近いものだと思います。しかし、世の中には障がいへの理解が十分ではないために、偏見や差別を受けたり、困っていても声をかけてもらえなかったりする人もいます。そのような現状を変えるためには、まず私たち一人ひとりが障がいについて知り、相手の立場に立って考えることが大切だと思います。
　また、私は障がいのある人を特別扱いするのではなく、「一人の人」として接することを心掛けています。よく、「お父さん大変だね」とか「可哀想」と思われてしまうこともありますが、たしかに父の闘病する姿で心痛むこともあります。しかし、父が病気であろうとな

かろうと私のお父さんということには変わりないので、病気になって見た目の変化もありましたが、話しかける時もいつも通り話しています。必要な配慮はしながらも、特別扱いをするのではなく、相手の気持ちを尊重することが本当の優しさなのだと思っています。その考えは、学校生活や日常生活でも生かせることだと感じています。

私は将来、言語聴覚士になりたいと考えています。その理由の一つも、父や母の姿を見てきたからです。病気や障がいがあっても、安心して暮らせるように支える仕事がしたいと思うようになりました。

共生社会は、特別な人だけがつくるものではありません。困っている人に声をかけること、相手を知ろうとすること、私たち一人ひとりの小さな行動の積み重ねによって実現していくものだと思います。

父の病気や母の介護を通して、私は「支えられる人」と「支える人」は決して別の存在ではなく、誰もがどちらの立場にもなり得ることを学びました。だからこそ、お互いを思いやり、助け合える社会をつくっていきたいです。これからも私は、誰もが安心して暮らせる共生社会の実現に向けて、自分にできることを考え、行動していきたいと思います。